



—御遠忌特別号—

2016年1月1日
＜発行＞
高山教区・高山別院
御遠忌推進委員会

飛騨御坊御遠忌七五〇

高山教区・高山別院 宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌

雑行も棄てて本願に帰す

このままでいのが、今の世・この私

法要期日 二〇一九平成三十二年五月十日(金)～十二日(日)
記念事業 高山別院本堂等御修復工事

本堂屋根葺き替え工事・耐震補強工事を実施

このたび、高山別院におきましては、来る二〇一九年五月に「高山教区・高山別院 宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要」を厳修することとなりました。また、ご法要に先立ち、記念事業として別院本堂屋根葺き替え並びに耐震補強工事を中心とした、「本堂等御修復工事」を行うことが決定されました。

七百七十余年前、真宗の教えは、宗祖親鸞聖人のお弟子であった嘉念坊善俊上人によって飛騨にもたらされました。上人は白川郷鳩谷に道場をお開きになり、以後、飛騨各地に念仏の道場が次々と建てられました。それら道場の中核となったのが、嘉念坊善俊上人の流れをくむ今日の高山別院照蓮寺です。創建以来、実に八回に及ぶ火災に見舞われながらも、そのたびに飛騨真宗門徒の再建にける熱意によって復興され、その法灯は絶えることなく守り伝えられてきました。

このたびの宗祖御遠忌法要並びに御修復事業では、宗祖親鸞聖人のみ教えを訪ね、現代を生きる私たちが扱って立つべきところを確かめてまいりたいと思います。そして、「御坊さま」と呼ばれ親しまれてきた高山別院が、今後も飛騨真宗門徒の中心道場として後世にわたって相続され、地域の方々にも開かれた別院が実現されていくことを願うことでもあります。

皆様とともにこの「御仏事」をお迎えいたしたく、ご理解・ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

高山教区・高山別院 宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌推進委員会



記念事業 本堂等御修復工事

高山別院が飛騨真宗門徒の中心道場として後世にわたって相続され、地域の方々や観光客をはじめ様々な方々にも開かれた別院としていくこと、また、安全安心な本堂を整備することを目的として、屋根葺き替え並びに耐震補強を中心とした御修復工事を実施することとなりました。

別院本堂屋根・瓦の破損及び雨漏りの状況

本堂屋根の瓦の下には防水シートの敷設がなく、瓦割れや瓦ズレが多数確認されました。また、修復が非常に困難なため、屋根の葺き替えが検討されることとなりました。



屋根瓦のズレ・破損



本堂東側の雨漏り



屋根下地からの雨漏り

耐震補強工事の実施について

屋根の調査とあわせて本堂の耐震性能を調査したところ、現在の本堂が新耐震基準に大きく満たないことが判明しました。この結果を受け、別院院議会で協議し、耐震補強工事を実施することが決定されました。

二期に分割した工事の実施

現在、雨漏りが大変な状況でもあり、まず屋根修復を急務とすることから、第一期工事として屋根修復工事及び庫裡改修工事を、第二期工事として耐震補強工事及び付帯工事を実施いたします。

【第一期工事】工事期間：2016年4月～10月末(予定)

- ① 本堂屋根の葺き替え(銅板葺き)
- ② 庫裡改修工事 屋内便所整備・炊事場改修

【第二期工事】工事期間：2018年2月～12月末(予定)

- ① 本堂耐震補強工事
鉄骨ブレイス・RC補強 他
- ② 付帯工事
中性化防止塗装塗・本堂照明(LED)・外陣サッシ・畳表替・放送設備
一階便所改修・パブリックスペース 他
- ③ 内陣荘厳修復工事

御遠忌に伴う様々な取り組み

共に『正信偈』のおつとめを

真宗の仏事には、親鸞聖人が著された『正信偈』が唱和されつづけてきた歴史があります。この度の御遠忌法要では、みんなで『正信偈』を声高らかに唱和し、全ての方々と感動を共にできる場を開いてまいります。

帰敬式(おかみそり)

御遠忌法要では、ご門首剃刀による帰敬式が執行されます。御遠忌を機縁に仏弟子として新たな歩みが始まることを願われます。

子どもごえんき

飛騨一円の子どもたちが集い、「子どもごえんき」が動まります。これを機縁として、各地域の真宗寺院において子ども会活動が活性化され、子どもたちもその家族も、世代を超えてともにお念仏に会う場がひらかれていくことを願いとして開催いたします。



小さなほとけさま

地域と連携した企画



ご坊夏まつり

大谷派勤行集(赤本)の現代語訳

『正信偈』のおつとめの際に手にする「赤本」の現代語訳本を発行いたします。親鸞聖人のお言葉を味わいながらお勤めしましょう。

荘川桜の本山移植

高山別院照蓮寺の歴史を物語る荘川桜。その苗木を、この度の御遠忌記念として、本山(東本願寺)境内地に植樹いたします。



荘川桜

ご門徒さまをはじめ有縁の方々 の御懇念を お願い申し上げます

御遠忌法要及び記念事業の推進のため、総額四億九千万円の御遠忌特別会計が予算化されました。懇志金については、飛驒一円のご門徒さま、有縁の方々、各寺院住職・寺族にお願いしてまいります。

何卒、ご理解、ご懇念を賜りますようお願い申し上げます。

会計期間 二〇一六年一月一日～二〇二二年六月三十日

(募財期間は二〇二二年末までの六年間)

高山教区・高山別院 宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌 特別会計収入支出予算

2016年1月1日～2022年6月30日

収入総額 ￥490,000,000-

支出総額 ￥490,000,000-

収入の部

項目	予算額	備考
1.懇志金	422,800,000	門徒・住職寺族懇志 他
2.法要御香儀	6,000,000	
3.冥加金	4,650,000	帰敬式・稚児・祝賀会
4.回付受金	56,500,000	高山教区・高山別院
5.雑収入	50,000	
合計	490,000,000	

支出の部

項目	予算額	備考
1.法要教化費	31,700,000	法要費・教化費
2.記念事業費	445,300,000	別院屋根葺き替え・耐震補強内陣修復費・付帯工事 他
3.奨励費	1,500,000	記念品 他
4.広報記録費	3,120,000	ひだご坊特別号・ポスター 他
5.事務所費	2,500,000	通信費・会議費 他
6.予備費	5,880,000	
合計	490,000,000	

今後も『ひだご坊』紙で 御遠忌・御修復の 動きをお伝えしていきます

高山における御遠忌に向けての動きは二〇一一年に始まり、別院本堂屋根の修復についての検討から着手されました。

まずは屋根破損状況の調査が行われ、部分修復では対処不可能であることが判明しました。また、東日本大震災など時代の要請もあって耐震調査も実施されることとなり、その結果は新耐震基準を大きく下回るものでした。早速、耐震補強工事計画が作成されますが、新築も考えるべきとの意見が出されたことから、二〇一三年二月から各組(各地域)を巡回し耐震改修か新築かについてご意見をうかがってまいりました。これを踏まえてさら

に検討がなされ、二〇一四年二月の別院院議会議談会において、屋根改修及び耐震補強工事を実施することが了承されました。

しかし、その後も、新築案や耐震補強工事を行う必要はないなどの意見が唱えられ、新たに設置された「御遠忌推進委員会」においても重ねての検討がなされましたが、今年五月、最終的には、本堂屋根改修と耐震補強工事を実施することが再確認されました。

御遠忌記念事業の決定に至るまで、約四年の間を費やしたこととなりますが、その間、もつと情報を出して欲しいという意見が聞かれました。

このような意見を踏まえ、皆さまのご理解・ご協力をいただきながら進めていくためにも、今後は毎月の『ひだご坊』紙において、御遠忌・御修復の動きについてお伝えしてまいります。

飛驒真宗の中心道場 「仲間の御坊さま」 再建史

【焼失と再建】

高山別院照蓮寺御坊さまは、天正17(1589)年、飛驒へ侵攻した金森長近によって、白川郷中野から現在地へ寺基を移して以来、焼失と再建を繰り返してきた。

高山移転わずか十年後の慶長元(1596)年、長近の家臣岩田弥助の放火によって焼失し、二代藩主可重の寄進によって再建された。しかし、その本堂は享保14(1729)年の大火で類焼。再建された本堂も天明4(1784)年の大火で類焼した。

この時代、飛驒は数十年来飢饉が続き、安永・天明の大原騒動の直後である。飛驒の人々は大いに疲弊していたが、ただちに復興に立ち上がり再建に着手した。ところが、そのさなかの天明8(1788)年、災いが重なった。京都の本山、東本願寺(真宗本廟)が類焼し灰燼に帰したのである。そのため、照蓮寺の造作を一旦中断し、本山東本願寺の再建を優先し、京に人足を上らせなどしたが、高山御坊再建の熱意は冷えることなく、享和元(1801)年に再建を成就した。

しかし、その伽藍も明治8(1875)年の高山大火で三度目の類焼に遭う。この時の再建も天明期と同じく東本願寺の再建と重なるものであったが、御門徒や飛驒の人々の御懇念とお取り持ちによって、明治19

(1886)年、二十間四面、高さ36メートルの檜皮葺の本堂は、鐘楼・庫裡とともに往時に復した。

その御坊さまも、昭和22(1947)年4月22日、本堂前、境内東の高山幼稚園から出火し、本堂も山門も鐘楼も焼失した。



昭和22年焼失の二十間四面の本堂

戦後の物資も乏しく生活も大変ななかであったが、昭和24(1949)年、各寺住職・飛驒の門徒代表によって、木造で十六間四面の本堂の再建が決議された。もう2度とこのような本堂は再建できないであろうという規模であった。昭和26(1951)年11月3日起工され、3年の歳月を経た昭和29(1954)年11月3日、晴天の下、上棟式の法要が、高山教区寺院住職の参勤と飛驒の門徒歓喜のなか盛大に行われた。

その後も内部の造作が続けられていたが、翌昭和30(1955)年12月28日、一青年の放火によって、戦後最大の木造寺院建築といわれたこの本堂は、棟の部分が焼け落ちた。人々の悲しみと落胆は大きいものであった。

しかし、宗派は七年後に、宗祖親鸞聖人の七百回御遠忌を控えて時間がなかった。悲しみに沈んでいる間もなく、防火と大木用材の調達の高難しさを考慮した、鉄筋コンクリート造の耐火建築本堂の再建が決議され、昭和38(1963)年に落成を迎えた。同42(1967)年、盛大に七百回御遠忌を厳修する事ができたのである。

【仲間の御坊さま】

念仏の根本道場である「御坊さま」を、430年間に6度も焼失させたことは大変悲しいことである(放火2、類焼3、失火1)。しかし、そのつど、私たちの先祖は、浄土真宗への篤い信仰と、親鸞聖人、嘉念坊善俊上人への報謝の証しとして、飛驒の念仏根本道場「御坊さま」の再建を成し遂げてきた。聞法の道場として集う「御同朋」「御同行」の真宗門徒に留まらず、他宗の信徒の方々も高山、飛驒の人々は「仲間の御坊さま」「みんなのご坊さま」と、崇敬の念と親しみをこめて集ってきたのである。このような飛驒の人々の想いが、戦後二度目の再建を短期間で決議し再建を成就させた。

現在の本堂の再建がなって約50年が過ぎた。焼失と再建の歴史は、飛驒の地にとって「御坊さま」がいかに大切なものであったかを物語っている。